

Venezuela

[ベネズエラ]

写真・文＝鈴木智子(フォトエッセイスト)

世界一雷の多い湖



マラカイボ湖南部にあるオロガ村の湖上生活。
村は半島のように長細く、端から端まで歩いて
も10分。軒下の洗濯物が家を華やかに彩る



湖の奥には熱帯雨林気候の浸水林が広がり、野生のホエザルやグリーンイグアナ、ツノサケビドリなど多くの野鳥が生息している



赤ちゃんを抱えながら食事を取るお母さん。赤ちゃんも元気に泣き、健康に育っている



玄関はバルコニーのようになっている、この家は洗濯機を置いていた。野生のサルも家族の一員だ



朝早く漁に出かけて戻ってきたお父さん。大人も子どもも暑くて何もしたくなる午後。みんなでだらっとするのも大切な家族の時間だ

地球ギャラリー vol.75

ベネズエラの北西に位置するマラカイボ湖。南米大陸の中で、チチカカ湖とも並ぶ大きな湖だ。毎日のように積乱雲が発達し、夜には稲光が輝く不思議な場所だ。

しかし、地元の人たちは雷の鋭さとは真逆。ゆったりとした笑いの中に包まれたラテンの人々だった。絶対的権力を誇っていたウゴ・チャベス元大統領が亡くなったから、政情が安定しないまま。砂糖やサラ

ダ油など生活必需品の流通も滞り、不便なこともあるけれど、湖畔は静かで普通の生活だ。「大都市にいると暴動も起こるから、やっぱり田舎に限るよな。ハッハッハ」と、のんきに笑う。昼時の暑くて何もしたくなる時間には無理して動かず、友人と家族と近所の人たちとのんびり座って話していればいい。そういった感じである。母親たちも、家事と子育てにあく



日が暮れ、じっとりした空気に包まれるマラカイボ湖。積乱雲が発達して、夜通し稲光が縦一直線に走る。静かに光るだけの時もあれば、嵐を呼ぶこともある



マラカイボ湖があるスリア州の州旗は雷マーク。小学校の入り口の壁にも描いてあった



床に穴が開いただけのトイレ。人々の生活は自然と一体になっている



町と湖上の家々を往復する観光ガイドの男性。観光客にもらったチップで野菜を買い村人たちと分かち合う。観光客がくれた古着を寄附することもある



ハンモックに乗せて子守りのお手伝い。あまり揺らし過ぎて、お姉ちゃんの方が水に落ちそうになっていた

地球ギャラリー vol.75

船着き場に揚がった巨大なエイ。マラカイボ湖の北部はカリブ海とつながっているのいろいろな種類の魚がとれるようだ



夕方にはお風呂を終えて、みんなそろって食事をする。村の小さな発電機が壊れていなければテレビを見ながらの団らん。停電の時は早めの就寝だ

そんなまったりとした時間は、日本の都会で育った私には、短い休暇でしかあり得ない夢の中の夢。そう思っていたが、それを現実としている人たちがここにはいた。
トイレに行った。浮き家の床に穴が開けてあるだけで、すぐ下は湖だ。用を足すと、一瞬で魚の群れが水しぶきをあげて食べにきた。大量の魚が湖にいるのにギョツとした。これだけ魚がいれば、飢えることはないだろう。
いくら最新の工業製品がなく、都会の人々に貧しいと思われようとも、飢えへの心配とはほど遠い生活だ。都会人が常に抱える将来への不安、お金を稼ぐのに必死になる姿は見ら

れなかった。湖には魚がいる。そして、家族、親せきがいつもそばにいてくれる。
「あーあ、またヘマしちゃったよ」
「仕方ないさ」
「そうだよな」
将来への不安から解放され、過去の悪さを責められることもない。そこには、今をみんなで笑い合える人々の姿があった。
現在、湖上には政府が援助する鉄筋家の建設が始まり、近い将来、彼らの生活も変わっていくだろう。ただ今は、どこまでも続く水平線と大きな空をふるさとしていた人たちの笑顔が、子どもも大人もとても人間らしく感じられるのだった。



夕方のお風呂上がりの少女。お風呂は家から飛び込める範囲の湖の中。子どもには少し深いが、ちょうどいい深さのところを選んで泳いで移動する

音楽で子どもたちを
育む仕組みといえは

エル・システマ



ベネズエラの国旗があしらわれたユニフォームを着て演奏するエル・システマの子どもたち。世界的にも著名なアーティストを輩出してきた

貧困や若者の犯罪が深刻なベネズエラ。それを音楽で変えようと活動が続けるのが、シモン・ボリバル音楽財団だ。ベネズエラ全土に音楽教室を開き、楽器は無償で提供。参加する子どもたちはなんと40万人を超える。子どもオーケストラや合唱団として世界各地で演奏を披露することもあり、世界最大の音楽教室といわれるまでに発展した。

単に楽器の演奏技術を教えるわけではない。社会から孤立している貧困層や障害のある子どもたちは、一つの音楽をみんなで作ることで、協調性や社会性、コミュニケーション能力を次第に学んでいく。コミュニティの一員としての自覚が生まれ、非行や犯罪に走らず、自立心を育むことが目的だ。

この「エル・システマ」と呼ばれる活動は世界中に広がり、2012年には日本でも活動を開始。東日本大震災の被害を受けた福島県相馬市や岩手県大槌町で子どもオーケストラなどを立ち上げ、音楽を通じた復興に貢献している。



ろうあ者が白い手袋をして手話で歌う「ホワイト・ハンド・コーラス」も評価が高い

地球ギャラリー

ベネズエラの文化を
知ろう!

取材協力：駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館
Photos: Courtesy of the Venezuelan Embassy in Tokyo

ベネズエラ料理といえば
豚肉のマンゴーソースがけ

ロモ・デ・コチノ・アル・マンゴ

ベネズエラの主食は、トウモロコシの粉から作ったパン。「アレパ」と呼ばれ、チーズや肉、アボカドなどを挟んでハンバーガーのようにして食べる。また、定番料理の「パベリオン・クリオリヨ」は、牛肉、黒豆、白いごはん、食用バナナのフライを載せたワンプレートで、屋台などで手軽に食べられる。全般的に塩と砂糖を使った甘辛い味付けが特徴だ。

そして、クリスマスの時期に登場するのが「アジャーカ」。豚肉、牛肉、鶏肉、オリーブなどをトウモロコシの粉を練った生地で包み、さらにバナナの葉でくるんで蒸したものだ。この時期だけのちょっとぜいたくで特別な料理だ。

駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館のモーリス・レイナ文化担当官の「我が家に代々伝わるレシピ」は「ロモ・デ・コチノ・アル・マンゴ」だ。「マンゴーは10キロ約500円と安く、そのままデザートとして食べるだけでなく、料理にも使われます。庭にマンゴーの木がある家庭では、熟すと家の前に置いて分けてくれることも。誰でも好きに食べていいんですよ」。誕生日など特別な日には、マンゴーの香りが漂う大皿料理をみんなで楽しむのが恒例だ。



【RECIPE】

●材料(20人前)

豚肉(ロース) 3kg / タマネギ2個 / 赤パプリカ2個 / ニンニク8片 / パセリ1束 / 白ワイン1カップ / マンゴージュース1L / 油・塩・黒コショウ少々

- ① 豚肉に塩と黒コショウをふり、大鍋に油をひいてこんがり焼く。
- ② タマネギと赤パプリカをすりおろし、ニンニクとパセリを細かく刻む。
- ③ ①をオープン用の深いトレーに入れ、②と白ワインを入れる。
- ④ 300度で③に焼き色がいたら、温めたマンゴージュースを加え、250度に下げて約1時間半焼く。串を刺して透明な肉汁が出たらOK。取り出して冷ます。
- ⑤ 残ったマンゴージュースは半量になるまで煮詰めてクリーム状にし、輪切りにした④にかける。
- ⑥ ジャスミンライスカパコーネス(食用バナナのフライ)を添えて出来上がり。



具を豪快に挟んで食べる主食のパン「アレパ」